

生の一部としての死

ロ 口伝えの話は語られ伝わっていくうちにその内容を変化させていくが、そうしたことが生じるのは、語り手に話の内容を変えようという意図があるからにほかならないということ。

ハ 口伝えの話には個性やオリジナリティなどにとらわれない自由さがあるが、書かれたテキストは、どうしても作者の個性やオリジナリティに束縛されてしまうということ。

ニ メールヘンのような口伝えの話はもともとオリジナルが確定できないが、それが書かれたテキストとなつてオリジナルなたちが確定すると、ほとんど変化はしなくなるということ。

ホ 書かれたテキストも口伝えの話も、多くの人に読まれたり聞かれたりしながら伝わっていくうちに、その内容や言葉や解釈のされ方がおのずと変化し定まっていくものだということ。

第六問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① その五月の気持の良い昼下がりに、昼食が済むとキズキは僕に午後の授業はすつぽかして玉でも撞きにいかないと云った。僕もとくに午後の授業に興味があるわけではなかったので学校を出てぶらぶらと坂を下つて港の方まで行き、ピリヤード屋に入つて四ゲームほど玉を撞いた。最初のゲームを軽く僕がとると彼は急に真剣になつて残りの三ゲームを全部勝ってしまった。約束どおり僕がゲーム代を払った。ゲームのあいだ彼は冗談ひとつ言わなかった。これはとても珍しいことだった。ゲームが終ると我々は一服して煙草を吸った。

「今日は珍しく真剣だったじゃないか」と僕は訊いてみた。

② 「今日は負けたくなかつたんだよ」とキズキは満足そうに笑いながら言った。

③ 彼はその夜、自宅のガレージの中で死んだ。N360の排気パイプにゴムホースをつないで、窓のすきまをガム・テープで目ばりしてからエンジンをつかせたのだ。死ぬまでにどれぐらいの時間がかつたのか、僕にはわからない。親戚の病氣見舞にでかけていた両親が帰宅してガレージに車を入れようとして扉を開けたとき、彼はもう死んでいた。カー・ラジオがつけっぱなしになって、ワイパーにはガソリン・スタンドの領収書がはさんであつた。

④ 遺書もなければ思いあたる動機もなかった。彼に最後に会つて話をしたという

〔出典〕
村上春樹
『ノルウェイの森』

〔著者出題歴〕
・秋田大学
・筑波大学
・千葉大学
・静岡大学
・学習院大学
・専修大学
・立命館大学
・関西大学

理由で僕は警察に呼ばれて事情聴取された。そんなそぶりはまったくありませんでした、いつもとまったく同じでした、と僕は取調べの警官に言った。警官は僕に對してもキズキに對してもあまり良い印象は持たなかったようだった。高校の授業を抜けて玉撞きに行くような人間なら自殺したってそれほど不思議はないと彼は思っているようだった。新聞に小さく記事が載って、それで事件は終わった。赤いN360は処分された。教室の彼の机の上にはしばらくのあいだ白い花が飾られていた。

〈中略〉

④ 東京について寮に入り新しい生活を始めたとき、僕のやるべきことはひとつしかなかった。あらゆる物事を深刻に考えすぎないようにすること、あらゆる物事と自分のあいだにしかるべき距離を置くこと——それだけだった。僕は緑のフェルトを貼ったビリヤード台や、赤いN360や机の上の白い花や、²そんなものをみんなきれいにさっぱり忘れてしまうことにした。火葬場の高い煙突から立ちのぼる煙や、警察の取調べ室に置いてあったずんぐりした形の文鎮^{ぶんしん}や、そんな何もかもだ。はじめのうちはそれでうまく行きそうに見えた。¹しかしどれだけ忘れてしまおうとしても、僕の中には何かぼんやりとした空気のかたまりのようなものが残った。そして時が経つにつれてそのかたまりははっきりとした単純なかたちをとりはじめた。僕はそのかたちを言葉に置きかえることができる。それはこうい

うことだった。

死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。

⑤ 言葉にしてしまうと平凡だが、そのときの僕はそれを言葉としてではなく、ひとつの空気のかたまりとして身のうちに感じたのだ。文鎮の中にも、ビリヤード台の上に並んだ赤と白の四個のボールの中にも死は存在していた。そして我々はそれをまるで細かいちりみために肺の中に吸い込みながら生きているのだ。

⑥ そのときまで僕は死というものを完全に生から分離した独立的な存在として捉えていた。^aつまり「死はいつか確実に我々をその手に捉える。しかし逆に言えば死が我々を捉えるその日まで、我々は死に捉えられることはないのだ」と。それは僕には、至極まともで論理的な考え方であるように思えた。生はこちら側にあり、死は向う側にある。僕はこちら側にいて、向う側にはいない。

⑦ ^aしかしキズキの死んだ夜を境にして、僕にはもうそんな風に単純に死を（そして生を）捉えることはできなくなってしまった。死は生のA、なんかではない。死は僕という存在の中に本来的に、既に含まれているのだし、その事実はどうだに努力しても忘れ去ることのできるものではないのだ。あの十七歳の五月の夜にキズキを捉えた死は、そのとき、同時に僕を捉えてもいたからだ。

■ ■ 第六問

僕はそんな X を身のうちに感じながら十八歳の春を送っていた。でもそれと同時に深刻になるまいとも努力していた。深刻になることは必ずしも真実に近づくことと同義ではないと僕はうすうす感じとっていたからだ。A かしどう考えてみたところで死は深刻な事実だった。僕はそんな思苦しい B の中で、限りのない堂々めぐりをつづけていた。それは今にして思えばたしかに奇妙な日々だった。生のまっただ中で、何もかもが死を中心にして回転していたのだ。

問一 傍線部 a～d の漢字の読みをひらがなで記せ。

a b c d

問二 空欄 A・B に入れるのに最も適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えよ。

A				
ホ	ニ	ハ	ロ	イ
目標	延長	前提	対極	連続

B				
ホ	ニ	ハ	ロ	イ
神秘性	陶醉感	同一性	虚脱感	背反性

問三 空欄 X には本文中で比喩的に使われている語句が入る。その語句を五字以上十字以内で抜き出せ。

問四 傍線部 1「事件は終った」とあるが、この表現は主人公のどんな気持ちを表現しているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

- イ 友人の死というとりかえしのつかない事態がもたらした衝撃。
 ロ 友人の死の真相を伝えることができなかったことへの後悔。
 ハ 友人の死を事務的に処理する世間に対する距離感。
 ニ 友人の死が世間の好奇心の餌食となることを免れた安心感。
 ホ 友人の死の真相を究明しようとしないう世間への絶望。

問五 傍線部 2「そんなもの」とはどういうものが、十五字以内で説明せよ。

問六 傍線部3「同時に僕を捉えてもいたからだ」とあるが、これは主人公のどのような状態を表現しているか。次の中から最も適当なものを一つ選び、記号で答えよ。

イ 友人のつらい無念な気持ち¹が理解でき、生きていく意味がわからなくなっていた。

ロ 友人の自殺によって、自分もいつか死ぬかもしれないと不安²になっていた。

ハ 友人の死に強いショック³を受け、これまでの自分の生き方が空しいものに思えていた。

ニ 友人の死によって、これまで遠い存在に思えた死の現実性⁴が意識にのぼるようになっていた。

ホ 友人の死の衝撃⁵から、すべてがどうでもよくなり、生死を混同する危険な意識に捉われていた。

第七問 次の文章を読んで、後の問に答えよ。

① かつて、人間の生活と生命の安全を脅かすものは「自然」であった。地震、津波、洪水、火山の噴火、台風、あるいは野獣の襲撃など、自然の脅威と呼ばれるものが、人間にとって、最大の危険であった。もちろんその前に、十分な食料や雨露を凌ぐだけの住居の確保、あるいは病氣と怪我への対策などが、よりキンキウな関心事であったろうが、しかし共同体が、あるいはそこで育まれた知恵が、そうした対策をある程度引き受けたとしても、「自然の脅威」はどうにもならなかった。この事情はどの文化圏においても、本質的には同じだったと言つてよいだろう。

② 西欧の歴史においても、事情は変わらなかった。とくにキリスト教の支配するヨーロッパにあつては、創造主である神の計画に支配されている自然は、人間の制御や支配の能力を超えたものとして、ある程度以上の自然への人為の介入は忌避され、あるいは諦められていた。むしろ自然のなかで人為を如何に生かすか、ということに人々は、フシンしていたとも考えられる。たとえば、森林のなかに溶け込むように建っている古い修道院や教会の建築などは、そう思わせるオモムキがある。しかし、一八世紀になって、ヨーロッパは俄然大きな転回を経験する。

〔出典〕
村上陽一郎
『安全学』

〔著者出題歴〕
・東北大学
・東京大学
・福井大学
・大阪大学
・九州大学
・鹿児島大学
・青山学院大学
・早稲田大学